５．子どもたちの近視対策について

世界中で近視の人が増えています。特に日本をはじめ東アジアの国々で近視が急激に増加しています。

令和２年度の学校保健統計調査が７月 28 日に公表されています。

視力の調査結果によると裸眼視力が 1.0 未満の小学生の割合が約 4 割、中学生が約 6 割に上る等増加傾向にあることが分かります。コロナ禍の巣ごもり生活が一因であると見られています。

裸眼視力 1.0 未満の児童生徒が増えている現状は、医学的には近視によって失明する人も増えることが指摘されており、深刻な社会問題だと思います。

2016 年、慶應大学医学部の研究チームが太陽光に含まれるバイオレットライトが近視の進行をおさえる可能性があることを世界で初めて発表しました。

現代社会はこのバイオレットライトが不足しがちであることが指摘されています。紫外線をカットするために様々な形で製品化されていますし、今では照明器具はバイオレットライトが含まれていない LED ライトが主流です。

更には、ほとんどのメガネでバイオレットライトが遮断される等、学校でも自宅でも、現代社会では多くの人がバイオレットライトを十分に浴びていません。

不足しがちなバイオレットライトを浴びるためには、太陽光に当たる時間を増やすこと、外で過ごす時間が長いほど近視に成り難いことが多くの研究から明らかになっています。

そこで質問です。

一点目に本県における児童・生徒の近視の状況について県教委としてどの様に把握されているのか伺います。

二点目に先に申し上げたとおり、裸眼視力が 1.0 未満の小学生の割合が約 4 割、中学生が約 6 割に上るといった状況は深刻な問題であり、今後、学校においてタブレット等の ICT 機器の使用機会が広がるであろうことを考えると、児童生徒の視力への影響も気になるところです。

したがって、これまで県教育委員会として、生活のリズムについて例えば「早

寝早起き朝ごはん」等、あるいはゲーム依存に対する教育など様々な形で対策を講じてこられたと思いますが、同様に近視抑制対策が必要不可欠であると思います。

シンガポール等アジアの国の中には学校教育のカリキュラムに、屋外活動の時間を組み込む動きが出てきています。

20 歳以下のおよそ 8 割が近視の台湾では全ての小学校を対象に、屋外にいる時間を増やすという政策を進めています。太陽光に当たる時間を一日 2 時間確保することにより、近視が予防できるとの学術的判断から対策が進められています。

このような屋外活動の活用等も含めて、本県の近視抑制対策についてどの様に考えるのか、教育長の考えをお聞かせください。

【吉田教育長の答弁】

⑴ 本県における児童生徒の近視の状況の把握について

国が実施している「学校保健統計調査」によれば、本県における令和2年度の裸眼視力1.0未満の児童生徒の割合は、小学校で45.8%、中学校で59.8%となっています。

ただし、学校保健安全法に基づき各学校で実施している健康診断の視力検査では、近視や乱視などの視力低下の原因は把握していません。

なお、検査結果については、保護者に通知し、必要に応じて眼科を受診するよう勧めています。

⑵ 屋外活動の活用等も含めた近視抑制対策について

近年、学校や家庭においてICT機器の使用機会が広がっていることを踏まえ、タブレット等を使うときの留意点を示したリーフレットを配布するなど、児童生徒の目の健康への配慮を促しています。

屋外活動と近視との関係については、更なる研究を待つ必要があると考えていますが、児童生徒にとって屋外活動は健康な体や豊かな心を育む上で、大切なものと認識しています。

県教育委員会としては、今後も、国が示す最新の科学的知見に基づいた情報に注視し、適切に対応してまいります。